

幻影の実験都市

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授

いとう たけし
伊藤 毅

模型の街



写真-1 破壊実験模型（同済大学）

まずは写真-1をご覧ください。これは何だろうか。超高層ビルが林立する上海...ではない。種を明かすと、この写真は上海屈指の名門大学同済大学キャンパスのなかの一光景である。上海が北京とともに急激な経済成長を遂げていることは周知のとおりであって、黄浦江東岸の浦東（プードン）には次々とモダンな超高層ビル（中国語では「大厦」という）が天空に聳え立ち、あたかもアジアのマンハッタンの様相を呈している。同済大学の土木学科では、こうした建築のミニチュアをつくって破壊実験を行うことによって、その構造安全性を検証しているのだ。

続いて写真-2に移ろう。これは上海城市規画展示館に設置されている500分の1の上海の全体模型である。日本でも森ビルが製作した東京の巨大な模型があるが、こちらの方が数等精密にできていて、何時間見ても飽きることがない。模型というものは不思議なもので、都市や建築をまるで神の手のごとく自由に操作できるような錯覚に見舞われる。実際、現実の上海でもまるで実物大の模型がどんどん建てられているような不思議な感覚があって、現実と夢との境界はかぎりなく曖昧である。いま建設中で2008年竣工予定の森ビル上海環球金融中心（アメリカのKPF設計）が竣工すれば、地上101階・

地下3階の中国最高層を誇るオフィスビルがこの仲間に加わることになる（写真-3）。

写真-2 上海全体模型

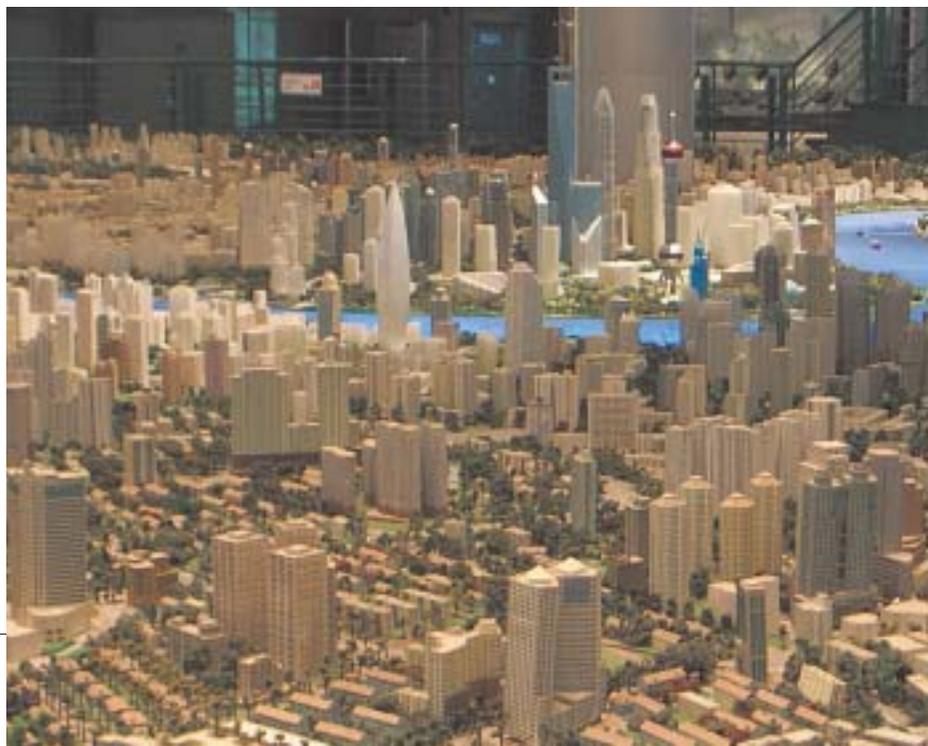




写真3 上海環球金融中心（HPより）

2010年上海市国際博覧会

上海では2010年5月から11月にかけて開催される上海市国際博覧会（以下、上海万博と略す）に向けてカウント・ダウンが始まっている。上記の上海城市規画

展示館正面玄関には万博までの日数を刻む逆時計が設置され、いやがおうにも市民の期待を盛り上げている。1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博が開催され、戦後の傷跡から立ち上がった日本には輝かしい未来が拓かれているようにみえた。それから40年後の中国では、日本の60年代を再現するかのように2008年北京オリンピック、2010年上海万博が予定されている。



上海万博の全体テーマは「城市、讓生活更美好」。英語では「Better City Better Life」。つまりこの万博は史上初の「都市」そのものをテーマにした万博なのである。ちなみに大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」であった。人類、自然、科学技術などのテーマは20世紀型の問題設定といってよく、多かれ少なかれ「発展」という価値観に拘束されていた。上海万博はそこから一步踏み出して、21世紀の成熟都市をターゲットにしたところに大きな意味がある。

「量から質へ」の大転換を進めつつある中国の基本的な国策は、工業化、情報化、都市化、国際化の「4つの化」である。そのなかでもっとも重要なテーマが都市化である。中国人総人口13億人中8億人は農村に居住しているが、ここ数年は年間1500万人が都市へと移動し、中国における都市化は世界史上稀にみるスピードで進行している。



写真4 上海市国際博覧会会場マスタープラン

こうした動向を踏まえて、上海市世界博覧会申辦工作領導小組辦公室では「Better City Better Life」のサブテーマとして、農村と都市との相互関係、さまざまな文化の融合、さまざまな形式の経済発展、科学技術の革新、21世紀の住宅地のあり方、を挙げている。ここには急速な都市化がもつメリット（ ）を否定せず、安定的な成熟型都市社会（ ）



写真-5 上海バンド

を形成しようとする、ポジティブな戦略と冷静なまなざしが読み取れる。

万博の開催予定地は、黄浦江中流の南浦大橋と盧浦大橋をはさんだ浦東、浦西地区である。会場となる「上海世博園」の設計は1999年に行われたコンペを制したフランスArchitecture Studio社の案が採用された（写真-4）。目玉は浦西と浦東を結ぶ歩行者専用の「花橋」で、長さ600メートル、幅50メートル、一番高いところで高さが200メートルあって、橋からは黄浦江の両岸が見渡せる。橋の中心には花の絨毯、橋の両端にもさまざまな種類の花が植えられ、全体として黄浦江上に浮かぶ空中庭園となる予定だ。それにしても北京の国家大劇院といい、この万博会場といいフランス人建築家がかつとも重要なコンペに強いのはどうしたこと

なのだろう。フランスはヨーロッパの中心を自任し、中国はもう一つの中心、世界の2大中心は共鳴しあうところがあるのかもしれない。

展示される実験都市

上海博物館の近くに1997年に登場した上海城市規画展示館は、まさに都市史博物館である。東京にも江戸東京博物館があるが、展示の充実度といいセンスといい、残念ながら上海に軍配を上げざるをえない。

ここでは上海の過去、現在、未来が工夫をこらした展示で楽しめる。とりわけ圧巻は先に触れた上海の全体模型。きわめて精密につくられたこの模型は1フロアを占めるぐらいの巨大さで、観客は模型のまわり



写真-6 浦東地区

に設けられた回廊を巡りながらさまざまな角度で都市全体を眺めることができる。自分の家を探している上海市民の姿も目にした。

上海の都市としての歴史は新しく、アヘン戦争後の南京条約(1843年)締結後、イギリス(1845年)、アメリカ(1848年)、フランス(1849年)が上海に租界とよばれる居留地を設けたことを直接的な契機としている。日本も日清修好条約(1871年)後租界に進出した。100年にわたる租界時代は、上海に欧米の文化や生活をもたらすことになり独特のハイブリッドな都市文化が形成されることになる。いわゆる上海バンドには往時の近代建築が数多く残されており(写真-5)、展示館でもこの時代の活気溢れる都市文化を写真や古地図、模型などで肯定的に表現している。

その後、日本の敗戦によって上海は中国の手に戻り、一時国民党が統治していたが1949年中国共産党の勝利により、中国最大の貿易港として工業、科学技術の一大拠点となる。文化大革命の時には上海から四人組を輩出したことが有名で、江沢民前国家主席は上海市長を経験しており、現在でも「上海グループ」という人脈がある。上海は一時期、経済的に落ち込んだ時があったが、80年代以降改革開放政策が打ち出され、現在未曾有の経済成長を遂げている。その成長をもっともシンボリックに示しているのが東方明珠塔を中心として高層ビルがたち並ぶ浦東地区である(写真-6)。

展示館ではいまもっとも活況を呈している浦東地区をクローズアップしつつ、上海のテーマとして、光



写真-7 未来の上海

(light)、速度(speed)、優雅(elegance)、増長(growth) 人(people)を挙げている。北京にはない都市的洗練がここには感じられる。

そして未来。上海万博に向けての将来はジオラマや360度画面のヴァーチャル・リアリティで表現される(写真-7)。リア・モーターカーに乗って過去から未来を旅するこの展示では、万博施設、国際空港、現在計画中の近代的な住宅地などが次々と登場し、夢と希望にあふれた将来の上海が演出される。

ここまで見てきてあらためて感じたのは、歴史的にあらゆる都市実験を受け入れてきた上海の特異な姿であった。唐突な外国

文化の流入、中国の代表的貿易港、上海マネーが飛び交う国際ビジネス、そして万博、未来都市。上海ではディズニーランドやユニバーサルスタジオの誘致にも積極的だ。多種多様な要素を貪欲に呑み込みつつ上海は一瞬たりとも停止せず未来へと駆け抜けていくことが宿命づけられている。ここでは模型と現実には大きな隔たりがない。

人と生活

上海の魅力はそこで生活する逞しい庶民の姿にあることも見逃せない事実だ。黄浦江西岸の旧市街にはまだまだたくさんの里弄住宅が残されている。里弄住宅とは1920年代に外国人デベロッパーによって建設された住宅で、里弄と呼ばれる路地に沿って高い

写真-8 三和里弄





写真-10 上海郊外の高級住宅街



写真-9 中二階の挿入

密度で住宅がたちならぶ。上海といえば里弄住宅というぐらい建築史の分野ではよく知られた存在である。しかし1980年代以降の経済成長で里弄住宅は次々と壊され、とくに近年の大規模な都市再開発によって

いまや風前の灯火となっている。

とはいえ依然として里弄住宅は健在であった(写真-8)。比較的ゆとりのある建築として供給された住宅は現在では複数世帯が住み込むかたちになっているが、そこには路地を媒介とした濃密な生活世界が展開している。

路地上空にびっしりと掛け渡された竿には洗濯物が溢れており、なかには鳥かごを吊している人もいる。彼らは住宅の改造にも熱心だ。写真-9は住宅の床を掘り下げ天井高を確保したうえで、あいだに中二階を挿入した例で、こうしたところにも利用できる空間は利用しつくす上海庶民の逞しさがうかがわれる。

一方、上海の郊外に出ると、そこには閑静な高級住宅街が広がっている(写真-10)。かつては外国人や

富裕層が居住した郊外住宅地に現在どのような人が住んでいるのか外からはうかがい知れないが、いまも prestige を保っている高級住宅街に住めるのは経済的成功をおさめた富裕層をおいて他にない。

現代アートの発信基地

いま上海でもっとも注目を集めているもののひとつに現代アートがある。その先端に行くのが莫干山路五十号(M50と略称されている)。上海を東西に流れ、黄浦江に合流する蘇州河に沿って、かつては数多くの倉庫が軒を連ねていた。やがて倉庫は使われなくなり空き家になったところに2000年ごろから若いアーティストが入ってくるようになり、アトリエやギャラリーとして転用される。2004年、上海市はこの自然形成的に生まれてきたアートスポットを全面的に支援すべく、市みずから公式に芸術産業を誘致する。かくしてニュー

写真-11 莫干山路 五十号ShanghART



ヨークのソーホー地区のような場所が生まれることになった。そのなかでもスイス出身のロレンツ・ヘルプリング氏が開いたShanghART(シャンアート)は最先端と目されており、ギャラリーには大型の絵画や彫刻、インスタレーションを展示している(写真11)。ここには若くて才能のあるアーティストが集まり、アート・シーンをリードする存在として世界的な注目を浴びている。

上海はかつて「魔都」と呼ばれるぐらい不思議な魅力をもつ都市であった。それは急激な都市化を経た現在も変わらない。旧と新、中国と外国、里弄住宅と超高層オフィスビル、伝統的な老街とファッショナブルな新天地、富裕層と庶民、伝統工芸と現代アート、さまざまな要素が渾然一体となって上海という都市の魅力がかたちづくられている。北京は現在オリンピックに向けて現代都市へと変身すべくやっきになっているが、まだまだ都市としての洗練度は上海の足下にも及ばない。

野暮ったい北京とは違う、そうした自負が街のなかに横溢しているようにみえる。それは早くから西欧近代を受容し、一貫して中国のフロンティア、あるいは実験都市として駆け抜けてきた上海だからこそいえるかもしれない。上海の未来には目が離せないものがある。

【お詫びと訂正】

本誌4月号の記事でモンブランの写真を表裏反転したまま掲載してしまいました。お詫びとともに訂正します。またこの点をご指摘いただいた読者の方に感謝します。